
とある主婦の2度目の人生

久藤雄生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある主婦の2度目の人生

【Nコード】

N4920P

【作者名】

久藤雄生

【あらすじ】

ごく普通の主婦だった主人公はある日突然死。目覚めると、赤ん坊？ どうやら生まれ変わったようだが、前世の記憶があるようだ。しかし何やらこの世界、おかしくないか……？

精神年齢はもはやおばあちゃん、外見10代。
そんなんで恋なんて出来るのか……？

転生トリップもの、またもや一発書きなので誤字脱字矛盾は大いにあるかと思えます、気になる方は閲覧をお控えください。

本編終了、番外編でティーナ編終了。

忘れた頃に番外編が上がるかもしれませんが完結済です。

登場人物

鳴海典子：なるみのりこ

大学生の娘1人、専門学生の息子1人のギリギリ30代主婦。

趣味は庭いじりとジム通い、その後のビール。お菓子作り少々。服飾少々。

好きなものは入浴剤やアロマ系、光モノ。

リイリイシユカ・リシエル・ブランシール・ルーフェン：

子爵家次女。

金髪碧眼の美少女。

前世の記憶がある故にナルシストに育ってしまった。

家族内の愛称はリイリイ。

侍女時の愛称はシユカ。

*

『リリスファイア王国』 『ヌーフエ地方』 『ルーフェン』

ルーフェンを領土とする子爵家。

名前は ファースト・セカンド・ルーフェン となります。

アレク：お父様。魔法騎士。

ガーネット：お母様。男爵家の令嬢でアレクに見初められ、結婚。
絶世の美女。

アールシェイド：お兄様。リイリイシュカの5歳上。10歳から騎士学校に通う。

マリーウエル：お姉様。リイリイシュカの3歳上。10歳から魔法学校に通う。

オーウエン：弟。リイリイシュカの3歳下。

ルル：リイリイシュカの専属メイド。美人系。

ライラ：乳母。

ルーファス：伯爵子息。3つ上で、婚約者候補の1人。

ハイル：ルーファス付きの従者見習。

ジャステイーナ・ジャステイン・プリマ・リリスフィア：愛称テイーナ：

第13王子。女装姫。

マリオン・マール・プリマ・リリスファイア：愛称リオン：
第5王子。噂では不能w

ティーナと同じ父王・母王妃。リイリイシユカより15歳上。
魔法騎士団所属。

*この兄弟は男女どちらでも使える名前を使用（ネットの人名表参考）

リリスファイアではファーストネームセカンドネームが似たような感じの名前が多いという設定。

特に最初の字が同じことが多い。

王族の名前は3番目は母親によって変わる部分なのでティーナとリオンは同じ・最後が家名？2人の場合は国名でもある。

メリー：ティーナ様付き侍女のリーダー。8つ上。

サリー：くせ毛。活発。イメージは魔法使いアニメの主人公。

モリー：ストレートお団子。垂目でおとなしそう。

1月から順に

新・氷・花・光・風・緑・木・火・土・地・陰・水の月。

誕生日の概念はなく、新の月で一斉に歳を取る。

リイリイシユカは水の月（12月）生まれ。

なので一ヶ月で1歳になりました。

プロローグ・死

「おかーさん！今日ごはんいらさないからー」

玄関で靴を履いていた娘が大声で叫ぶ。

「何かあるの？」

「新歓コンパ」

「はいはい、じゃあ今日は魚にしよう」と

「そうして」

魚嫌いの娘がいない日は、大抵魚にする。

嫌いなものを出すと食べないのだ、この娘は。
甘やかせすぎたな。

私もダンナも魚好きなのに誰に似たんだか。

ダンナと私と、大学生の娘、高校生の息子。

ごく普通の4人家族。

今日はパートも休みだし、大掃除でもするか。
天気も良いので布団を干して、それから
。

突然、心臓が痛みを訴えた。

痛い、苦しい。

そう思った瞬間、私の記憶は途切れた。

0 誕生

暗転して、それから。

私は今、暗い世界で漂っている。

水の中のようで、ゆっくりと揺れる。心地よい。

時折、話しかけられているようだ。

でも何を言っているのかわからない。

このままこの時間が続けば良いのに、そうも行かないようだ。

何か強大な力で、排除されようとしている。

狭い場所に押し込められる。

痛いし、苦しいし、嫌なのだが、抵抗することもできず。

明るく賑やかな場所へ放出された。

*

乳をのみ、垂れ流し、泣いて、寝る。

それが赤ん坊の仕事だ。

どうやら私は赤ん坊のようだから、その赤ん坊の仕事をこなす。

漠然とああ死んだんだな、生まれ変わったのかな、と思う。
忘れてるだけで赤ん坊の時は前世の記憶があるのかな。
成長過程で忘れて行くのかもしれない。

どうやら私には乳母がいるらしく、乳母と両親、兄弟らしき子供は
金髪碧眼だ。

おそらく私も金髪碧眼に違いない。

家族の話を聞いていると、どうやら此処は貴族のお屋敷らしい。

まあ人種的に日本じゃないのはわかってたけど、現代社会で貴族制
度が残ってるってどこ??

ヌーフエという土地なのはわかったけど、それってどこの国?
他の固有名詞も聞いたことのないものばかり。

まあ赤ん坊なんだし、時間はまだたっぷりあるよね。

色々考えてると眠くなってきた。

おやすみなさい。

数日過ごしてわかったこと。

会話は理解出来るけど、参加は出来ない。

喉が成長していないからだろうか。

今いる場所もわかった。

リリスファイア王国、ヌーフエ地方、ルーフェン。
聞いたことのない国名。

小さい国で知らないだけかと思ったけど、どうやら違うらしい。
何故なら、魔法を、使っているからだ。

え、なに、ハリー ツター？

存在が明かされてないだけで実は魔法使っていて存在してるの？

とまあ現実逃避したところでどうにもならないわよね。

私はどうやら前世と違う世界で生まれ変わったらしい。
それが良いわけでも悪いわけでもない。
とりあえず戦争のない平和な国でありますように。
私はただそれだけを願い、今日も眠るのだ。

「リイリイ」

どうやら私の名前らしい。

「リイリイ、はやくおおきくなってね」

私の丸まった掌に、指を入れくすぐってくる。
それが何だか楽しくて、私はきやらきやらと笑う。
それが嬉しかったのかお姉様も笑った。

「おかあさま！リイリイがわらったわ！」

「本当ね、可愛らしい」

「はやくおおきくならないかしら。そしたらいつしよにあそべるのに！」

あと2年は待つてください、お姉様。

お姉様はオレンジ色のドレスを揺らしながら、私を覗きこんでいる。

ああ、私も成長すればドレスを着ることになるのね。

お母様は美女だしお姉様も美少女なので、きっと私も美少女よね。

そうでないとドレスが痛々しいので助かるわ。

ああ、そろそろ眠くなって来た・・・。

おやすみなさい、お姉様、お母様。

1 3歳

リイリイシユカは、3歳になりました。

3歳と言っても、生まれてから新の月を越した数が年齢になるので、実際のところは2歳みたいなものなただけど。

朝、メイドのルルに優しく起こされる。

ルルは20代後半の、美人なおねーさんで、優しいから、好き。

リイリイシユカ付きのメイドさん。

黒地のワンピースに白いレース。ミニスカートじゃないから絶対領域がなくて残念です、ハイ。

身支度を済ませ、朝食は乳母と摂る。

まだ柔らかい食事ばかり。

お姉様たちはバケットにサラダ、スープとフルーツの朝食のようで、羨ましい。

そのうちにお姉様の家庭教師がやって来る。

私には礼儀作法や言葉を教えてくれる。

お姉様はその横で歴史や地理、算術を習っている様子。

私はいつもそれを横目で見て覚えるのだ。

昼食を摂って昼寝をして、午後のお勉強。

お姉様は魔法のお勉強で、私は絵本を読んだりお散歩したりする。

お屋敷の外には出れないので、専らお庭で過ごす。

いつもルルが付き添ってくれる。

そして夕食を摂り湯浴みをして就寝。

湯浴みはお湯で体を拭くだけ。
週に1度だけお湯に浸かれるけど、少ない！少なすぎる！
私は毎日湯船に浸かる派なのに。
真夏でも浸かる派なのに！
それに入浴剤も入りたい。
どうやらこの世界にはないようだけど。残念すぎる。

*

「さてお嬢様、今日はどのドレスに致しましょう」
「ルルがクローゼットを広げ、聞いてくる。
元々ルルが選んでくれていたけど、ある日私がこれがいい、といっ
たことでこうして聞いてくるようになったのだ。」

「きょうは、れーすをあしらったぴんくのどれすがいいわ。りぼん
もぴんくで、かみのけとっしょにあみこんでほしいの」

「髪の毛と一緒に、ですか？」

「うん。るる、おねがい」

私の髪の毛もルルがセットしてくれる。
鏡を見るとかわいらしいリイリシユカ。
無駄に前世の記憶があるせいでナルシストに育ってしまったている。
しょうがない、だってかわいいんだもん。
こんな娘欲しかった！

だってあの子、私に似ちゃって可愛げなかったんだもん。

今日もかわいいな、と鏡に見入る。

困ったナルシストっぷり。

私はこうやってこちらで流行していない髪型を強請る。

なのできつと可笑しな髪型とか可笑しな子って思われてるかも。

でも良い！

だってかわいいから！！

ドレスは自動的に届く。

たぶん誰かが手配してるんだらうけど、私は知らない。

私はドレスの気に入らない部分をルルに頼んで手直ししてもらおう。

世界が違うからなのかな、イマイチなんだもん。

折角なんだし好きなドレス来たい！

大きくなったら自分で好きなドレス選べるかな。

楽しみ。

日除けに帽子をかぶり、庭に出る。

ルルが付き添ってくれて、お散歩。

私はこの庭が好きだ。

昔はガーデニング好きで、お庭すっごくいじってた。

こっちでは庭師がいるし、一応お嬢様だから出来ないのが残念。

煉瓦の小道があって、その横には小さな白い柵。

その柵には緑のはっぱが巻きついていてかわいらしい。

色取り取りの花が咲き、藤棚のようなものもある。

白いベンチとブランコ、ティーテーブルなんかもあって素敵。

ティーテーブル、私も置きたかったけど、広さが足りなくて断念したっけ。

中でも一番のお気に入りは、噴水。

この噴水、下の方がキラキラしてる。

どうなってるのかわからないけどとても綺麗。

お散歩のときはいつもこれを眺めてる。

「お嬢様は、噴水がお好きですね」

「うん。きれいだもの、だいすきよ」

女は光モノが好きな生き物だ。

過去、現在、未来のダイヤのネックレス、ダンナに強請って買ってもらったし。

ああ、気に入ってたのにな。

「ねえるる、このおはな、かんそうしたらゆあみにつかえるかしら？」

噴水脇に生えていたラベンダー。

群生が少し離れたところにあるから飛んで来たのかな。

「乾燥、ですか・・・聞いたことありませんけど、庭師に聞いておきますね」

「おねがい」

ラベンダーの香りは癒されるから好きなのだ。

アロマオイルとか抽出出来たら湯浴みに使っただけだな。

「いいにおいのするおいるって、きいたことある？」

「良い匂い・・・香油ですか？」

「こづゆというよりはせいゆなんだけど」

「精油、ですか・・・？」

イマイチ伝わってない。

あんまり有名じゃないのかも。

水蒸気蒸留で抽出出来るはずだから、そのうち試してみようかな。
まだ器用に手が動かないから成長しないと無理なのよね。

夕食を摂り、湯浴みをして、ふわっふわのベッドに入って、おやすみなさい。

いい夢が見れますように。

2 7歳

リイリイシユカは7歳になりました。

「婚約者候補？」

「はい。お嬢様ももう7歳ですから、そろそろ候補の方に会われた方がよろしいのではないかと」

婚約者候補とか、もう7歳とか、何だか以前では考えられないこと
なんだけど。

この世界の貴族ってものはえらく早熟なのねえ。

「私の婚約者候補の方は、どのような方なの？」

「うふふ、お嬢様のために、このルル！完璧な調査書を用意致しました！！」

「・・・ありがとう」

何だかルル、とっても楽しそう。

「お嬢様は評判の御令嬢ですもの、引く手数多ですわ！」

評判というのは母親譲りの容姿もだけど、水蒸気蒸留を利用した精油の精製で貴族たちの間で少々有名になったこと。
精油はマッサージや入浴剤、香水の代わりとして使っている。

お父様はお姉様と私を伯爵以上のお屋敷に嫁がせたいようだ。

お兄様は騎士学校を卒業し、今は宮仕え。お姉様は今春から魔法学校へ通う。

3つ下の弟もいずれは騎士学校に通うため、まだ4歳だというのに剣術を習っている。

まさしく親の敷いたレールの上というやつだ。

私はそれに不満はない。

親の決めたことには従うつもり。

政略結婚だろうが何だろうが、よっぽど生理的に受け付けられない限りは大丈夫。

精神的には40代。結婚する時は50代に近いのだ、今更恋も何もないだろう。

元々ダンナに恋をしていたわけでもなく、私は恋愛に置いて非常に淡泊なのだ。

恋なんてしなくても生きていける。恋心がなくても愛情さえあれば良いのだ。

ルルから分厚い調査書を受け取り、一枚目に目を通す。

3つ上の伯爵子息。お姉様と同じ年ね。

名前、年齢、肩書き、家族構成、将来の方向性、身長、周りの評判など事細やかに書かれてある。

ぺらりと捲り、2枚目。

今度は5つ上の侯爵子息。

「ルル・・・もしかして、これ一枚ずつ違う人なの？」

「ええ、もちろん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・またにするわ」

多すぎる。

会うことになったら見ることにしよう。

私が結婚相手に求める条件は、美容関係にお金を使わせてくれて味覚が合う、である。

調査書を見てもそれは書かれてないし。

おそらく16で正式に婚約し、結婚となるだろうから、まだまだ時間はある。

良いひとから売れて行くとお母様が言うので、もっと早いかもしれないけど、それでも10にもならない今はありえない。

面倒だし、一番お金持ちのひと、とか駄目かしら？

*

婚約者候補の一人に会うことになった。

3つ上の伯爵子息。

伯爵と連れ立って我が家を訪れるらしい。

お父様はこの伯爵さまと懇意にされているらしく、よくお屋敷をお訪ねしていると聞いた。

「はじめまして。リイリイシュカ・リシエル・ブランシール・ルー
フェンと申します」

ドレスの裾を摘まみ、優雅に礼をする。

今日のドレスは薄紅色。大輪の花をモチーフにしたデザインでお気に入りに入り。

「なんとかかわいらしいお嬢さんだ。こっちが息子のルーファス、それから従者見習のハイルだよ」

ルーファス少年は頬を赤く染めて私を見てる。
罪作りだなあ、リイリイシユカ（私）。

とりあえずにつこりと微笑んでおく。
ますます真っ赤になるルーファス。

「おやおや、息子はお嬢さんを気に入ったようだね。子供たち、庭で遊んでおいで。私は子爵とお話があるからね」

「ではルーファス様は、お姉様と御学友になるのですね」

ルーファス少年は、今春よりお姉様と同じ魔法学校へ通うらしい。

「将来は魔法騎士ですか？」

将来爵位を継ぐだろうが、それまでに何をするか。

魔法学校へ行く貴族は、魔法騎士か研究者かというのが大半で、伯爵さまは武官よりなひとなので、きっと魔法騎士だろうと踏んで。

「はい。魔法騎士になりたいと思ってます」

「ルーファス様はすでに剣術も魔法もかなりの腕前です。必ず魔法騎士団に入団出来ます！」

従者のハイルくんは大分ルーファス少年に傾倒しているようだ。
お目目キラキラ。

「そうなのですか、すごいですね！ハイルさまも魔法学校に？」

「ええ、僕はルーファス様の従者ですから」

誇らしげに微笑むハイルくん。

従者の鏡つて感じ。
ルルにも似たような空気を感ずるけど。

「リイリイも魔法学校へ通うのですか？」

ルーファス少年の方が身分が高いし年も上なので、愛称で敬称なし。
気にはならないけど、リイリイって愛称はあまり好きではない。

「魔法に興味はありますが、攻撃魔法はちよつと・・・」

学校へ通うとなると、攻撃魔法は必須。

元々競争とか、好きじゃないのよね。面倒だし。

お風呂を入れるための水や熱、光源のための熱や光、植物の成長促進の緑、洗濯のための水と風。

その辺りの魔法は一通り、家庭教師に習って習得済み。

才能があると褒められてるから、もしかしたら強制で入学させられちゃうかなあ。

「出来れば行儀作法の一環として侍女見習いに出るとかの方が・・・」

「！ぜひ、うちに来て下さい！」

「え？えっと・・・まだ3年はあるし、どうなるか分かりませんが・・・お父様とお母様に伝えておきますね」

ルーファス少年の剣幕に怯んでしまった。

そんなに好きか、リイリイシユカ（私）。

まだ会ったばかりだというのに。

随分面食いだなあ（自分で言う辺りもうナルシストを超えた）。

3 10歳

リイリイシユカは10歳になりました。

「王宮、ですか」

10歳になったら侍女見習に出たいので、ルーファス少年の家はどうでしょう、と。

確かに3年前にその話はしたけども。

その話がどうやら大きくなっちゃったみたい。

・・・軽いキモチだったのに。

「折角侍女見習に出るのなら、国王様もぜひにとおっしゃってねてね」

リリスフィアの国王様たちは割とフレンドリー。

たち、というのはリリスフィアには国王様がたくさんいるから。

「具体的には、第十三王子というか、姫というか・・・」

「え？」

「王子なんだけどドレスがお好きで、それでリイリイと話が合うんじゃないかと」

何それ流行りの男の娘こってヤツ？

「はあ、まあ、良いですけど」

「そうか、良かった！」

大喜びのお父様。

面倒だけど親孝行になるのなら、それはそれで。

*

新の月下旬。

現在地点はリリスフィアの王宮。

明日から第十三王子付きの侍女である。

今日は到着日なので仕事はナシ。

案内された部屋は実家の半分くらい。

それでも十分広い。

洋服ダンスと飾り棚、ベッド、机、イス、姿見。

お茶をするための小さなテーブルまである。

持ってきた荷物を片付ける。

鉢植えや裁縫道具、花器や茶器。

自分で作った作品たち。

色々並べてかわいい部屋の出来上がり。

大・満・足！

洋服ダンスに持ってきたドレスやナイトウェアを入れる。

紺色の侍女服が数枚掛けられていた。

ふわりとした紺色の膝下ワンピース仕立て。

エプロンには白いレースが少々。襟元のリボンも白。留め具は金。

ヘッドドレスがレース仕様なのが私的高ポイント。気に入った。

「明日からこれを着るのね。きつと似合うわ」

でも何か物足りない。

制服の改造ってありかしら。

聞いてみよつと。

時間もまだ早いし、お庭へ行ってみたい。

でもその前に挨拶から。

近所付き合いは大事です。

勇んで隣室を訊ねたけど、留守。

侍女だろつし、お仕事かな。

案内された部屋は、リイリイシユカと同じ貴族の令嬢ばかり。

行儀見習いの一環として王宮の侍女をしている子たちが大勢いるらしい。

小学校や中学校といった教育機関もないこの世界、市井に交ることも禁じられていたリイリイシユカには友達がいらない。

ここでなら友達が出来そうだと、少々浮かれ気味。

問題は精神年齢が大幅に違うことくらいである。

侍女の朝は早い。

自分たちの主より早く起きて身支度をしなくてはならないからだ。とはいえ前世で早朝から弁当作りに勤しんでいたため、早起きは苦にならない。

「おはようございます」

侍女専用の食堂で昨日部屋まで案内してくれた侍女に声を掛ける。

「おはようございます、シユカ。良く眠れましたか？」

「はい、おかげさまで」

第十三王子の侍女頭であるメリーさん。

リイリイシユカより8つくらい年上の美人さん。

侍女は呼びやすいように愛称を使うそうなので、ここではシユカと呼んでもらうことにした。

「今日からティーナ様付きの侍女の仲間となります、シユカです。色々教えてあげるようにね」

「シユカと申します、ご指導の程、宜しくお願い致します」

侍女仲間はメリーさんの他は2人。

サリーとモリー。

覚えやすいのか覚えにくいのか微妙なところだわ。

シユリーじゃなくてゴメンナサイって感じ？

愛称リーリーにすべきだった？

「私もまだ侍女になって一月なの。よろしくね」

ストレートの髪を綺麗にまとめあげているモリー。
垂目なところが優しそう。

「私もまだ二月かな。よろしくね！」

くせ毛で活発そうなサリー。

2人がフレンドリーな感じで良かった。
友達になれそうだわ。

「新しくティーナ様のお世話をさせていただきます、シュカと申します」

「ふうん」

噂の男の娘はドレス姿。想定内。

上から下まで視線を巡らされ、値踏みされるリイリイシュカ。
良い出来でしょ。

素材は極上、手入れも極上！
私の最高傑作よ！

「まあまあかな」

なんですって!?

私の最高傑作を馬鹿にしたわねこの小娘! いや男の娘!!

そういうアナタもまあまあよ!

ドレス好きならもつと極めなさいよねそもそもアナタその色似合わないっていか太って見えるっていかその色はやめた方が無難ねというかそのドレスのリボンの位置おかしいわよあと一センチ上にしなさいよハイウエストなのかウエストなのかハッキリしなさいよねっていかそのドレスの色にその髪飾りってどうなの靴の色もどうにかしてそのドレスにその靴っておかしいでしょどう考えてもっていかこの世界のひとつで化粧下手よねっていか化粧品が発達してないのよね、

内心なんてどうでもいいのよ、とりあえずにつこり微笑んでおけば良いのよ。

だってリイリイシユカの顔で微笑まれたらたとえ同性でもどきっとするわ。

「うっ・・・シユカ、とりあえずお茶!」

「畏まりました」

一礼して、給湯室へ向かう。

基本的に侍女は2人1組で行動する。

私は新人なのでメリーさんとペア。

給湯室でメリーさんにお茶の淹れ方を習う。

うん、現代と変わらない。

違うのは葉っぱの種類と蒸らし時間くらいかな。

「ティーナ様は言葉遣いはよろしくないですが、お優しい方です。大目に見てあげてください」

「はい、大丈夫です」

そもそもあんな小さい子に本気で食って掛かれるわけがない。精神年齢的には孫くらい差があるっていうのに。

お茶とチョコレートをワゴンに乗せてティーナ様の部屋に運ぶ。

「まあまあかな」

メリーさんに視線をやるとにつこりと微笑まれた。もしかしてまあまあって褒め言葉かしら？

「ありがとうございます」

微笑む。

「ほ、褒めてない!」

素直じゃない子供だこと。

でもまあ娘たちに比べれば全然かわいいものだわ。

こうして一日目は主の性格とお茶の淹れ方を学習しました。

食堂で朝食を摂った後、メリーさんと共にティーナ様の部屋へ向かう。

ティーナ様の着替えを手伝い、髪を結う。

アイテム選びはティーナ様本人が行っているようだ。

それが終わると朝食だったりお茶を淹れたり本を運んだり、ティーナ様がやりたいことの手伝いをする。

家庭教師が午前には2時間授業に来るのでその間は部屋の隅で待機。

合間の時間のお茶の準備をしたりするのだ。

お昼の準備やお昼寝の準備。

家庭教師が午後にも2時間やって来るので、部屋の隅で待機。

此処までが朝番のお仕事。

週に1回お休みを取るため、1日だけ朝番と昼番、両方をする日がある。

今週は早番で6日目に両方、7日目がお休みとなる。

お休み明けからは遅番。6日目がお休みで7日目も両方、その繰り返し。

第十三王子だし、まだ幼いし、仕事内容は軽い。

リスフィアでは国王が複数存在して王位継承争いというものがない。

国王＝議員、多数決、みたいな？

第十三というのはそのまんま13人目の王子ってことだけど、国王全員の子供を通算して数えるのでたぶん次男だったはず。

王位継承破棄しない限りは国王は年々増えて行くことになる。

王位継承は国王の血を引く男児なら誰でもOK。国王は一夫多妻制なので増えるときはがつつり増える。

だがしかし王位継承を破棄する王子は意外と多いらしい。

*

ティーナ様の選んだドレスは桃色のふんわりとした形だ。それなのになぜ靴は茶色なの！リボンは黄色なの！ひとつひとはかわいいアイテムなのに残念すぎる！！

「ティーナ様。そのドレスならばこちらの靴の方がティーナ様にお似合いだと思います」

メリーがぎよっとしてる。

まずかつたかしら？

でも誰の目から見てもこれはおかしいでしょ！

私が選んだ桃色のバレエシューズの方が断然かわいい！

「それからリボンはこの素材、この色！シューズのこの飾り部分と同じ色合いだし、ぴったりですわ」

ぽかんとしているティーナ様。

うん、ここまで来たら言ったもの勝ちよね。

「さ、かわいく結って差し上げますわ。鏡の方を向いてくださいませ」

うふふふふ。

リイリイシユカには負けるけど、ティーナ様も美少女（？）だもの。楽しいわー。

実際は男の子だからちょっと髪質固い気がするけど、大丈夫。

リボンを絡め前髪からサイドへと編み込みつつ、纏め上げる。
完・壁！
いい仕事した！

「ほら、かわいいでしょう？」

ティーナ様は瞬いて、それから微笑んだ。

「すごい！こんな髪型初めて見たっ！」

あら今日は素直ね。

軽く興奮状態のティーナ様はぴよんぴよん飛跳ねて私に抱きつく。

小さい。

細い。

かわいい。

頭を撫でてやると我に戻ったらしく、勢いよく離れた。

つまらないわね。

「……………？」

そして眉間に皺。

「どうかなさいましたか？」

「良い匂いがした」

良い匂いで思い当たるのは色々ある。

ベッドや洋服ダンスにバラのサシェを置いてある。

マイブームがバラなので、部屋のアロマオイルもバラだし、湯浴みの時も使っている。

因みに石鹸や化粧水もバラである。

「バラでございますか？」

「バラ？」

「ええ、コレです」

制服のポケットにも潜ませてあるサシエを取り出した。

「コレ！コレ何？」

「バラのサシエですわ。王宮のお庭にもバラがありますでしょう？」

「アレがコレになるの！？」

「ええまあ・・・」

ドレスが好きならばこういうものも好きなのだろうか。

この国の石鹸は良い匂いはしないし、香り系が弱い。

今まで香り系が発達しなかったのが不思議だ。

だって中世ヨーロッパな感じなのに。香水はその時代に生まれたものだというのは有名な話だし。

「お気に召したなら、新しいものをお作りしましょうか？」

「本当！？」

「はい。材料はありますのでそう時間は掛かりません」

ティーナ様はすごく嬉しそうだ。
メリーさんも驚きつつも微笑ましそう。

＊＊

ティーナ様が授業を受けている間、じつと片隅で待機。
暇なので授業内容に耳を傾ける。
文字だったり算術だったり歴史だったり地理だったり。
概ね私が習ったものと同じような感じね。
違うことだったらおもしろかったのに……。

昼食はティーナ様のご希望で一緒に摂った。
どうやら懐かれたらしい。

午後の授業は礼儀作法や芸術や武術といったものの時間。
本来王子ならば剣術を学ぶ。
しかしティーナ様は特殊なので礼儀作法と芸術。
何て言うか、リリスフィアって寛容だよな。
普通王子が女装ってNGだと思う。
まだ幼いから許されているとかそういうこと？
いや王位継承の破棄が自由ってところでリリスフィアの自由度が窺える。

王妃様が正室側室別れていないところ、身分が関係ないところもすごいと思う。

今いる王妃様の4分の1が平民だし。
その分御姫様が外の国に嫁ぐというケースがあまりない模様。
確かに他の国では身分、気にするもんね。

こうして二日目はティーナ様の着せ替え基ドレス選びを学習（？）
しました。

さて気合を入れてサシエを作りますか！

「自分のこと棚上げして弟批判かよ、フザケンナ。男のクセに女々しいのよ、アンタ」

「なんだとッ！」

剣を抜きやがったので魔力を最大限込めて魔法を放った。
ザマアミロ！

ティーナ様にお仕えして一月。

王宮に慣れ仕事に慣れ平穏な日々。

メリーさんともサリーともモリーとも仲良くなれたし、ティーナ様も今ではまるで姉妹のように慕ってくれている。

気分的には孫なんだけどね。

そんな平穏な日々には水を差すような真似をしてくれやがったのは、父王も母王妃も同じご兄弟で在らせられるマリオン・マール様。愛称はリオン様。

御歳25とまあ年の離れた兄弟である。

彼はどうかやら弟の女装が気に食わないらしい。

それで侍女である私に突っかかって来た模様。

本人に言えよ。

そう思っても一応王子だし、穏便に対応。

割と我慢してただけどつついっぴつつんきちやったっていうか。

*

「ちょっとそこに座りなさい」

「……もう座っている、というか座らせられている」

「気分よ気分」

不敬罪はもう今更。

とりあえず強制正座である。
いやあ魔法って便利よねえ。

「それで？」

「あいつは、母上が”女の子が欲しかったのに”という一言で、ア
レだ」

「ふむふむ」

「そんなことで女装に走るなど、おかしいだろうが」

「まあおかしいかもしれないけど、子供は大人の些細な一言が原因
で深く傷つくこともあるわよ」

「アレはそういう問題か!？」

「うるさいわねえ、じゃあアンタが不能なものもおかしいじゃない」

「ふ！」

あ、泣きそう。

ごめんって、本当のこと言って。

「不能ではない！女が嫌いなだけだ！」

「なんだ、男色か」

「違う！」

「不能じゃなくて女が嫌いなんでしょ？男色じゃない」

「違う！俺は断じて男に性的興奮は覚えんツ！」

性的興奮って。

「まあそれはどうでもいいわ。次期国王が世継ぎを作れないのは問題だわ。おかしいって言われるでしょうよ」

「っく」

「言われると嫌でしょう？それなのにどうして実の弟に同じこと言うの？」

「それとこれとはっ！」

「同じよ。家族って割と無条件で味方するものだと思うんだけど。」

それが家族愛ってどうか」

そりゃあ悪いことをしたら叱るけど、それで見捨てたりはしないと
思うのよね。

「確かに父も母も同じ兄弟ではあるが、殆ど話したこともない」

王宮のような広い場所で生活し、各自部屋もあり、基本的に部屋食
となればそりゃあ接触も少なそうだけど・・・兄弟なのに？
王族ってそんなものなのかしら。

「とにかく、似合ってるんだから良いじゃない」

「は？」

「ティーナ様、ドレス似合ってるでしょう？だから良いのよ」

「・・・は？」

「かわいいは正義よ」

「・・・は？」

「ティーナ様はドレスが似合ってるてかわいいわ。だから女装してて
良いの」

「お前、何を言っている？」

「私の持論よ。似合うならば女装だって許されるの」

まあネタならば似合わない方がオイシイ。
笑いが取れる。

「ティーナ様は似合ってるから万事OK!ね?」

「ね、ってお前・・・」

「ティーナ様が成長すれば女装は止めるか王位継承は辞退かどちらかよ。あまり気にしなくても良いと思うわ」

「・・・お前と話してたら気が抜けた」

「うふふ。それでは私、仕事がありますので御機嫌よう」

侍女服の裾を摘み礼をする。

このまま不敬罪については忘れてね。

「おい待て」

「・・・何でしょう?」

「お前、名前は?」

「・・・シユカと申します」

どうせ嘘ついてもばれるし、正直に答える。

これが私とリオン様の記念すべき?初対面である。

「とまあそういうことがあります」

「シユカ・・・」

米神を抑え呻くメリーさん。

「結果良ければすべてよし、ですわ」

あれから度々リオン様はティーナ様のお部屋を訪ねるようになった。リオン様は魔法騎士団に所属しているので暇というわけではない。非番の日に折をみて、という感じなのだけど、今までそういうことがなかったのでメリーさんは不審に思ったようだ。

ティーナ様は純粋にリオン様の訪問を喜ばれているようなので良いと思うんだけど。

リオン様も優しい兄上って感じ。

微笑ましいわあ。

「シユカ！シユカも一緒にお茶しましょう！」

「はい、畏まりました」

ティーナ様に呼ばれ、今日もお茶に参加する。

あまりよくないことはわかってるけど、部屋の中だけですから。

メリーさんは溜息はついたけど、弱弱しく微笑んだので諦めてくれたようです。

ミントティにスイートチョコレート。

それが私の一番のお気に入り。だけどティーナ様はミントティが苦手な様子。

美味しいのに。

「だってスースーするもん」

「それが良いんじゃないですか」

「え〜・・・」

本日晴天なり。

テラスのテーブルでティーナ様と2人でお茶を頂いています。

メリーさんも最早諦めの境地、室内の掃除をしているのに、私お茶。いいのかなあ。

いや良くないのはわかってるんだけど、ティーナ様のおねだりには勝てません。

今日はホットチョコレートとお茶請けに砂糖の使われていない焼き菓子という組み合わせ。

至福の時間。

「そういえば最近、リオン様いらっしやいませんね」

「今更・・・お兄様は2週間前から遠征に行かれてるんだけど・・・
言ってたよね」

「そうでしたっけ」

はて、記憶にございません。

「……可哀想なお兄様。大規模な魔物討伐だっというのに……」

「そうなのですか？申し訳ありません、私そういうのに疎いもので」

この世界に生まれて10年、実はモンスターの類を見たことがない。王宮に来るまでほとんど家から出たこともなかったし、王宮へは馬車だったからモンスターの姿は見えていない。

別にそういうの好きなわけじゃないから積極的に見たいとも思わな
いけど。

「……戻って来たらせめて何か声を掛けてあげてね」

「はい？」

よくわからないけど、お疲れ様的な？

それともありがとございます？

「それはそうと……新月、シユカはおうちへ帰るの？」

もうすぐ王宮へ来て1年。新月となる。

こちらの世界にはGWやお盆がなく、社会人（というのかな？）の長期休暇と言えば新月のみ。

要するにお正月休みである。

「そうですね……ルーファス様も来るだろうし、実家に戻ります」

ルーファス少年は現在魔法学校の3年生。

寮生活をしていて、春夏冬の長期休暇には会いに来ていた。今年の春と夏は私がいなかったのですがどうかかわらないけど、新の月はきつと会いに来るだろうし。

「ルーファス様って？」

「私の婚約者候補の方です」

「婚約者候補!？」

「ええ、私一応貴族ですもの。婚約者候補くらいいても不思議じゃないでしょう?」

そういう世界だと聞いているし。

「そりゃ・・・そうだけど。でも・・・候補ね。婚約者はまだいないよね?」

「ええ、正式な婚約者はまだおりません。16歳くらいで嫁ぐようなので、婚約者もそれくらいでと言われております」

「・・・良かった」

「どうかされましたか?」

「うっん、何でもない」

*

「ティーナ様、リオン様がお見えですよ」

「お兄様！お帰りなさい！！」

「ただいま、ティーナ」

抱きつくティーナ様を抱きとめるリオン様。

何て微笑ましい！！

話したことも数えるほどだったという兄弟には到底見えない。ついついつつとり見つめてしまう。

「シユカ、お茶の準備をお願いします」

「はい」

メリーさんに声を掛けられ我に返る。

お仕事、お仕事！

リオン様もいらっしゃるのでごく普通の紅茶を用意。

ティーナ様にはミルクとお砂糖を。

リオン様にはレモンを。

「シユカ、シユカも一緒にお茶にしよう？」

「畏まりました」

今日は室内のテーブルで3人席に着く。
自分の分は何も入れないでストレート。

「お帰りなさいませ、リオン様。ご無事で何よりです」

「ああ・・・ただいま」

リオン様、何だか穏やかに微笑うようになったなあ。
不思議！。

「そつだ、お兄様！シユカ、婚約者候補がいるらしいですよ？」

「本当か！？」

「ええ、本当ですが・・・そんなに驚くことですか？」

「いや・・・なんとというか・・・そう、まだ10歳じゃなかったか？」

「ええ10歳ですが」

外見は10歳だ。それは確か。

中身がちよつとおばあちゃんですけどね。

10歳で婚約者候補って普通じゃないの？

7歳のときからいたような気がするんだけど。

1人首を傾げる私。

「・・・あー俺は25だが婚約者がいないのでな」

「ああ、ふん」「いやいやいやいや」

遮られた！

そうよね、ティーナ様の前でこの発言は良くなかったわ！

あ、不能じゃなくなつて男色だったっけ。

どちらにせよ女から見れば似たようなものかしら？

「すべて突つ撥ねているからな」

そうですよねー、ばれると困りますもんね！

うんうんと憐れみの目で見ると私に気付いたのか、リオン様の眉間に皺が寄る。

「・・・何か誤解してないか？」

「してませんよ？ただ大変そうだなあって」

「・・・そう思うなら、シユカが俺の婚約者になってくれないか」

おっと真面目な顔になったぞ。しかしだ。

「偽装結婚というやつですね！どちらにせよお世継ぎが産めないならすぐばれますよ」

「いやそうではなく・・・俺はシユカが好きなんだ。その、本気で」

「は・・・」

呆ける。

「俺の婚約者になってほしい」

「まさかのロリコン!!!!!!!!!!!!!!」

「ちがつ！」

「違います！私10歳です！」

「うっ」

「ねーロリコンって何？」

「ティーナ様は知らなくて良いことです!!」

不能でも男色でもなくロリコンだったなんてっ！
それなら犯罪にならないように胸のない童顔な成人した女性を嫁に
しろっ!!

「はぁ・・・」

私は届けられた花束やドレス、お菓子を見て溜息をつく。
あれから、毎日贈り物が届く。

正直鬱陶しい。

侍女の部屋はそこまで広い作りではない。

それなのに毎日何かしら送られてくると、段々と部屋が手狭になっ
てくるというか・・・。

「はぁぁぁぁぁ」

今日こそしつかり断ろう！！

「・・・お待ちして居りました、リオン様」

リオン様はよくティーナ様のお部屋に来るので、会う機会はすぐに
やって来た。

いつものようにお通しし、お茶の準備をする。

これまたいつもの通りにティーナ様にお茶に誘われて、一緒にお茶
をする。

「リオン様、もう贈り物を止めてください」

前回「申し訳ないですし」というような断り方をしたことがいけなかった。
遠慮深いなどと思われるに違いない。
そうではない、そうではないんですよ。
迷惑なんですよ！

「何故？」

「部屋がいっぱいになりました。置く場所ありません」

「では後宮の一室を使えば良い」

即答！？

もしかして最初からそれが目的なの！？

「……必要ありません。贈り物を頂く理由もありません」

「理由ならあるだろう。口説いているんだ」

「それはきっぱりとお断りした筈ですが」

「諦めない」

「……私もいずれ成長します、このままではありませんよ」

「だからロリコンではないとっ」

「ねーだから、ロリコンって何なの？」

「ティーナ様は知らなくて良いことです」

「また仲間外れ・・・」

ティーナ様はしょんぼりしてお菓子を千切り始める。

「ともかく・・・私には婚約者候補の方もいます。リオン様のことを好きになることはありません」

リオン様がひゅつと息をのんだ。

ここまできっぱり言ったことは今までなかった。

傷ついた様子だけど、仕方ないことだ。

本当のことだもの。

だって明らかに息子年齢よ？

っていうか実際の息子より年下だわ。

好きになるってある？

「って、ええええええ」

泣きだしたー!?

ちよつとアンタ、25でしょ？

10歳児に振られて泣きだすってどうなの!?

「お兄様!？」

ティーナ様がおろおろ。

私もおろおろ。

「・・・帰る」

袖で涙を拭きながら、リオン様は帰って行く。

いやいやいやどんだけ子供なの……。

予想通りだけど、リオン様はあれからティーナ様の部屋に来なくなつた。

新の月、私が長期休暇を取ったときには来てたみたいだけど。

贈り物も届かなくなり、平穏な日々。

……のはずなんだけど、心にぽっかり穴が空いたような……。

……気分には、残念ながらなっていない。

むしろああ良かった、で済んでいる辺り、私ってなんて薄情なの、とは思つ。

でもいずれはこうなっていたわけだし、良いんじゃないかしら。

まだ若いんだもの、すぐ次も見つかるわよ、うん。

……胸の小さな童顔な成人女性、早々いるかしら。

「……シユカ」

外行こうかと自室の扉を開けると、リオン様がいた。
何故ここに。

「リオン様、ごきげんよう。いかがされましたか？」

「話がしたい」

「中に御這入りになりますか？」

「ああ」

流石に王族を外で立ち話で済ますというわけにはいかず、自室に招き入れる。

「いつもよりランクが下のお茶しかありませんが……」

「良い」

愛飲しているブレンドティとリオン様に頂いたお菓子を出す。

私は普段お菓子を食べないので、これしかないのである。

ブレンドティも茶葉の状態ではなく、自分でティーバッグにしてある代物だ。

だって楽なんだもん。

「それでお話とは」

「寂しかった」

リオン様に抱きしめられる。
ときめきもなければ身の危険も感じないが。

「・・・シユカは？」

「私は別に、寂しくありませんでしたが」

その答えに、リオン様はくしゃりと顔を歪める。
傷つきたくなければ、聞くな。

振られた相手に普通聞く？

私はそんなに優しくくない。

「どうすれば、好きになってくれる？」

うざい。激しくうざい！！！！

「ですから、好きになることはございません」

「・・・くそ、押してダメなら引いてみるって言われたのに」

「それでうまくいくこともありますが、うまくいかないこともあります。というか私が相手ではうまくいきません」

リオン様は私を抱きしめたまま、溜息をついた。

「好きにならずとも、良い。だが、結婚してほしい。そばに、居てほしい」

「申し訳ありませんが、婚約者候補がいますので」

「・・・俺も、婚約者候補に、なる」

「は？」

「決めた、そうしよう。それが良い」

「ちょ、リオン様？」

「そうすればシュカが16になったとき、もしかしたら結婚できるかもしれないだろう？」

もしかしたら～できるではない。

リオン様が願い下げしない限り、確実に私の相手はリオン様になる。王族より上の家なんてないのだから当たり前だ。

父親も母親も確実にリオン様との縁談を進めるだろう。

「ま、待って下さい」

「何だ？」

「あの、私、違うんです！」

ルーファス少年は、親同士が決めたこと。

だから申し訳ないなとは思うものの、諦めてもらうしかないと思う。けどリオン様は違う。

親同士の決めたことでもなければ、むしろ選り放題な立場だ。

「わ、私、私、本当は、5X歳なんですぅぅ!!」

「コホン、申し訳ありません、取り乱しました」

深々と頭を下げる。

「いや、良い。どういふことか説明してもらえるか？」

「はい。信じていただけるかわかりませんが・・・

私には、前世の記憶があります」

「前・・・世？」

リオン様はぽかん、とただただ私を見つめる。

そうですね、頭可笑しいんじゃないかって思いますよねっ！

「30代後半で、夫と、子供も2人いました。子供たち、今頃きつとりオン様よりも年上です。

それである日急に心臓が痛み、気がついたら赤ん坊で」

・・・そして今に至る、と。

「なるほどそれでか・・・」

「何がですか？」

「言動が10歳じゃないからな。むしろ姉上とか母親とか、年上のようだと、思っていた」

「……………ロリコンじゃなくてマザコン!？」

「何でそーなるっ!!しかもこの流れでそれかっ!？」

「むしろババコン!!??？」

「っていつか肉体年齢11歳なんだから問題ないだろっ!」

「やっぱりロリコン!!!!????？」

「ちがーっ!!!!」

「……………信じて、くれるんですか」

「ああ」

「そう……………ですか」

初めて前世の記憶を話した。

信じて貰えた。すごくうれしい。

だってどうしても普通じゃないし、私だったら信じてない可能性の方が高いと思う。

「ありがとうございます。……………だけど、そろそろ離してくれませんか?」

「嫌だ」

「リオン様……」

私を抱きしめるリオン様の手の上に、手を重ねた。
そして。

ぐいつ！

ドスン！

「いつつ」

「セクハラで訴えますよ」

腕を取ってくるつと引つ繰り返したのである。
体制が体制だったので出来た技。

「まあ、信じてくれたならわかったでしょう？5X歳の精神年齢で
25歳の子供を好きになるのは無理があります」

「それは……そうかもしれないけど、俺はそんなことで諦められ
ない」

「聞き分けのない子供は嫌いです」

「しょうがないだろう！好きなものは好きなんだ！！」

若いなあ。熱いなあ。

「はあ・・・わかりました。私が16になったとき、私のことをまだ好きだったら、その時は前向きに考えます」

「本当か?!」

「はい。ただ贈り物とかそういうの、本当にやめてくださいね。それに5年もありますから、心変わりもそれはするでしょう。その時は心おきなくその方を娶ってくださいね」

「大丈夫!心変わりなんてありえない」

「はいはい。それじゃ、私は出掛けますので、リオン様も出てくだ
さい」

新の月の休暇明け、城下町へ来たのには訳がある。

こちらの世界でも新春セールがあるのだ!!

女は買い物好き。これ常識。

かといってドレスや靴、アクセサリーの類はたくさんあるので自重。
買うのは刺しゅう糸や毛糸、布、綿、茶葉などだ。

私の王宮での趣味は専ら手芸である。

ぬいぐるみやクッション、ワンピースなどの簡易服、刺繍など。
ティーナ様に一番人気なのはレースで出来たクマのぬいぐるみ。
中身はバラのドライフラワーなので良い香り。

芳香剤にもなり飾りにもなり優秀なクマちゃんなのだ。

そして今はビーズのクッションを作っているところ。
ビーズといっても代用品だ。発泡スチロールっぽいもの、こっちで見ないし。

低反発も作りたいたいところだけど、未だ代用品が見つかっておらず。

「きゃっ！」

「っと、失礼」

人が多いこともあり、ぶつかってしまった。

落としかけた荷物を、キャッチしてくれた親切な人。

騎士の鎧を着た、凜々しい美人。

赤い髪を後ろで一つに束ねている。

「イイ……！オスカル様……！」

「あ、ありがとうございます……！ごめんなさい、私の不注意で……！」

「ま、ベルばら読んだことないけど！」

「男装の騎士って感じ？」

「カッコイイわ！」

「いや、こんなに人が多くては仕方がない。……君は確か、ティ

ーナ様なの？」

「はい、ティーナ様の侍女で、シユカと申します」

「そうか。私はリオン様の側近をしているキムだ」

「……リオン様なの？」

女嫌いと言いつつ、側近は女。不思議なことをするなあ。

「ああ。側近とは名ばかりだな。あの方はすぐどこかへ行ってしまうので」

「大変ですねえ」

「そうなんだ・・・今後1人でいるのを見かけたら是非知らせてほしい」

「わかりましたわ」

その後キム様は部屋まで送ってくれた。

なんて紳士！！

これが男だったら丁重にお断りだったけど、女の人だし甘えさせて貰った。

「そうだ！良かったらこれを」

お礼にと、ソープをひとつ、プレゼント。

バラの香りがするもので、実家で作っているものだとはいっても家は商家ではない。

自分の家で使う分だけ、作っているのである。主に私の好みで。

オイルは使う人使わない人がいるけど、ソープは誰でも使うでしょ！

「ありがとう」

ああ！笑顔もステキ！！

リイリイシユカはすっかりキム様のファンになりました。
今度リオン様におねだりして連れて来てもらおうかしら。

あれからリオン様は、私がいる時にティーナ様を訪ねてくるようになった。

そして3人でお茶をする。

勿論、今日も。

「そういえばリオン様。リオン様の側近の、キム様って素敵ですね！」

「なっ！」

「キム様??」

「ええ、赤い髪の毛、とても凛々しい、美しい方です」

リイリイシユカの美しさとはベクトルが違う。
だから良いのよ。被らないっていうか。

「どこで知り合っただんだ・・・」

「リオン様が私の部屋に来た日の午後です。偶然、町で」

「ぐ、・・・そう、か」

「リオン様は女性が苦手だというのに側近は女性なのですね」

「父王と母上が勝手に決めただ。女らしくない女から慣れると言

って……」

「なるほど……」

効果のほどは見ての通り。変化ナシといったところ。

「10歳になると王子には勝手に側近が付けられる。……ティーナは、わからぬが」

「へえ、そうなんですな」

「俺は魔法騎士団に入団することが決まっていたから、魔法騎士団の者になったんだが……ティーナは、どうするんだ？」

「え……」

瞳が揺れる。

ティーナ様は現在9歳。来年には道をはっきりと決めなければならぬ年齢。

王子は魔法学校か騎士学校、または貴族学校に進むのが常。

その後の進路はまちまちだが、他に選択はないと思っ

ていた。姫は10歳を過ぎても学校へ行かないこともある。

「……まあまだ1年ある。今から考えれば良い」

「……はい……」

「そうだ、キムの話だったか。そういえば町で侍女に会ったと言っていたな。良い香りの石鹸をもらったと言っていた」

「ええ、バラの石鹸なんですよ。リオン様も使われますか？」

ティーナ様はすでにお使いになっている。

「ええと・・・そういうのは、婦人の使うものでは・・・」

「そんなことはありませんわ。汗臭い殿方など流行りません。差し上げます、これですれ違う人にあの人いい香り！って思われてください」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あぁ、有難う」

心の籠ってないありがとうを頂きました。

今思えば、これさえなければ、と思わずにいられない。いや時間の問題だったかもしれないけど。

*

「シユカ、母上がああバラの石鹸が欲しいそうなのだが・・・持つておるか？」

「え？ええ、ひとつでしたらございます。今お持ちしますか？」

「頼む」

いつも通りのお茶の席での遣り取り。
話はここで終わったと思っていた。

「シユカ、バラの石鹸はまだあるか？」

「実家にはまだたくさんあると思いますが……」

「母上がもっと欲しいとおっしゃるんだが……遣いを出してもらえないだろうか」

「良いですよ」

会う度に出てくる母上とバラの石鹸。

純粹に、自分の作ったものが気にいってもらえて嬉しい、そう思うだけだった。

実家から運ばれてきた石鹸をリオン様に渡した。
リオン様から王妃様に渡る。

「バラの石鹸は、子爵家で作っているのか？」

「はい、実家で使っているので使う分、実家でメイドたちが作ってくれますよ」

「もっとたくさん作らないのか？」

「もっとたくさん……ですか？王妃様が気に行つて下さったのでしたら、その分多くお作り致しますよ」

「そうか。伝えておく」

私は、王妃様1人が使う分増産するくらいまったたく問題ないですよ、とそういう意味で言ったのだ。もちろん、リオン様も意味は分かっていたと思う。

あれだよね、こじ付けってどうか、ね。

「・・・母上が、子爵殿を城に呼んだらしい」

「・・・え？」

「バラの石鹸のことで話があるのだと・・・今日の午後」

「ええええ！」

「まあ・・・その・・・うん。子爵殿に損はない、と思う」

茫然としている私に、リオン様はにっこりと笑った。

「俺としても未来の義父上に挨拶出来る良い機会だしな」

「え、ちょ、ま！」

「ははは。5年程早いが問題ない」

「ある！問題ある！」

「聞こえぬなあ」

え、なにこれ。
何がどうしてこうなった!?

仕事が終わりに、リオン様に呼ばれお父様の元へ行つたとき。
もうすべてが、終わっていた。
そう、終わっていた……。

「かわいいリイリイ、新の月に帰って来たときは何も言つてなかつたのに……。いつの間にリオン様と親しくなつたんだ?伯爵さまには私からお話ししておくから、安心してリオン様と仲良くするんだよ。良いね?」

駄目だ、完全にその気だわ……。
口元がひくりと引き攣つた。

「は、い……」

「そうそう。リイリイの考えたバラの石鹸を国の特産物として売出すそうだよ。それで、試験的にルーフェンの領地で大量生産することになって」

「……そうですか」

もう何も驚かない、動じないわよ、私は!!

「それでリイリイの考えた色々なものを売り出そうってことに」

「はああ!?!」

私の考えた色々なものって何!?

どれのことを言っているの!?!??

「コホン、失礼、取り乱しました」

「ふふ、驚くのは無理もない。これで国が発展すれば良いね」

お父様のお話してるとのほんとするわ。

いつもはそれで良いんだけど、今はそれで良いのかしら……。

「オイルとかサシェとか化粧水とか、色々作ってただろう?それを全部持ってきたら、どれも気に行って下さったんだ」

何だかすごく嵌められた感があるのは気のせいではない、はず。

「リリスフィアに来てお土産を買おうってなって、それがリイリイの考えたものなんだ。すごいことだよね」

にっこりと笑うお父様をみてたら、毒気が抜かれるというかなんというか。

「……そうね、お父様」

私は諸々を諦めた。

エピローグ 16歳

・・・リイリイシユカは16歳になりました。

ええ、そうなんです、16歳なんです。

折角リオン様はその気になったのだからと、16歳になった途端、
婚約。

そして春を待ち、結婚式を挙げました。

ティーナ様がイスフェリアの魔法学校に通う王族の方（ティーナ様の従弟らしい）に、ウェディングケーキを注文したらしく、元の世界と変わらない感じの結婚式。

結婚するに辺り、色々と条件を付けた。

のまないなら逃亡します、と。

まず、仕事を続けたいということ。

この場合の仕事というのは、侍女ではない。

嵌められてから5年、ハーブ用品の開発、化粧品の開発以外に、衣服や下着のデザインも手掛けている。

とはいっても、自分で商店を経営しているわけではない。

自分で考えたものを売り込んでいるというだけ。

採用されなくても自分が使う分だけ作るけど。

そしてこれが大事。

リオン様の王妃は、私だけ、ということ。

だって当たり前でしょ!?

何で他の女抱いてる男に抱かれなくちゃならないのよ!冗談じゃな

い!!

・・・コホン。

うん、浮気は良くないと思うのよね。

女性が苦手なんだし、それはないと思うけど、何事も例外ってのがあるし。

「はあ・・・」

「シユカ様？どうかされました？」

「モリー！様付けはやめてったらー！」

「そうしたいのは山々ですが・・・一応建前っていうか」

「・・・それを言っちゃう時点で駄目だと思うの」

後宮に引越すことになり、サリーとモリーが私の侍女になった。気心しれてるし、ありがたいんだけど、様付けは頂けないわ。

「そうそう。今お客様が来ているらしいですよ」

「お客様？」

「スーフエスフィア様の御学友で・・・ケーキを作ってくださいった商会の代表の方です」

「へえ・・・会ってみたいわ」

「・・・そうですね、来年にでも」

「今すぐ」

「……無理ですよ、臨月なんですよ？っていつか予定日過ぎてるんですよ？」

元の世界なら別に歩き回れたのに。
こっちの世界が過保護すぎるのよね。

っていつか妊娠早すぎなのよ。

計算合わないってどういことよ。

(心当たりはあるけどね！)

「はぁ……はやく出てこないかな、ポーンと」

生まれない限り軟禁状態が続く。

「シユカ」

ノックもなく、どかんと扉が開かれたかと思うと、勢いよくリオン様がやって来た。

「リオン様、ノックくらいしてください」

「どうだ、調子は」

「聞けよ」

ああ、何だかどんどん口が悪くなっていくわ、私。リイリイシユカの容姿で口が悪いなんて！

「まだ生まれる気配はないですね」

「そうか・・・」

しょんぼりとしてしまったリオン様の頭を撫でる。

「まあまあ、初産なので少しくらい遅れるなんてザラですから」

元の世界でも長女は10日ほど遅れて生まれてきた。

予定日は予定であって決定ではないのだ。あまり気にすることではない。

しかし30過ぎた男が16歳にもっと撫でてと上目遣いで見てくるのってどうなんだろう。

正直かわいいと思ってしまう私、末期。

・・・恋ではないかもしれないけど。

まあ、良いよね。

愛しいと思う心はあるのだし。

リオン様の頭を撫でながら、無理やり納得させる。

恋愛面が前世と似たり寄ったりな気がしないでもないけど、まあそれもありなのかな。

番外1 ティーナ 9〜10歳 (シユカ11〜12歳)

どうしよう。

「はぁ・・・」

どうしよう。

「うっ・・・」

どうしよう。

「ティーナ様？先ほどからいかがされました？」

きょろんと首を傾げたシユカを、僕は見上げた。

何故かわいいと呟かれる。

シユカって偶に意味のわからないことをいう。不思議。

「あのね、僕、今9歳でしょう？」

「はい」

「あと数か月で10歳なの」

「はい」

「だから、今後の身の振り方っていうか・・・」

10歳、というのは王族では分岐点になる。
王子なら側近が付き、魔法学校か騎士学校に入る。
未は魔法騎士団か騎士団に入り、いずれ王位を継ぐ。
姫は割と自由。
だけどそのうち貴族に輿入れする。

僕はいくらドレスを着ていても、男の子だ。
選ばなくちゃいけない。

ドレスを捨てるか、王位を捨てるか。
でも僕には目立った才など何もない。
王位を捨てて生きていけるかと言われても、わからない。

「でしたら、魔法学校へ行きましょう」

「どうして？」

「魔法学校なら王子でも姫でも通えます。学校の日は無理でも、休みの日はドレスを着れますよ」

「そっか」

「ええ」

そっという問題じゃない気もするけど、いつか。

「卒業してから選べば良いんです。女の子として、魔法で食べていくか。国王になるか」

「うん」

シユカに話して良かった。

シユカは僕にとってお姉さんみたいな存在だ。たぶん5年後に本当のお義姉様になるけど。

住み慣れた場所から動きたくないの、リリスフェアの魔法学校へ入学を決めた。

リリスフェアの魔法学校は剣が必須。

父上に魔法学校へ通いたいというと、教師が付けられることになった。

入学前に魔法を練習する人がほとんどだからだ。

魔法と剣の教師が来ることになり、礼儀作法と芸術の時間が大幅に削られた。

別にそんなに好きだったわけではないから、良いのだけど。

*

新の月を迎え、10歳になった。

新の月になると大半の侍女が休暇を取り実家に帰ってしまう。

シユカがいないなんて、つまらない。

10歳になれば付けられる側近も、新の月の休暇が明けないとやって来ない。

僕はひとり不貞腐れて王宮内をちよろちよろ。

勉強も休みになるから暇なんだもん。

何かおもしろいことないかなあ。

こっそりと魔法騎士団の訓練を覗いてみる。

あ、お兄様だ。

カッコイイ。

シユカと話しているとアレだけど、こうしてみると本当にカッコイイ。魔法騎士団はあんまり敵つい男の人っていないから、むさくない。

うーん、やっぱりお兄様が一番良い男だ。

剣を習うようになったから、わかる。

お兄様って強かったんだなあ。

あ、あの人も強い。

お兄様とはタイプが違うけど。

「え……」

お兄様より、格好良い人がいた。

赤い髪を一つに束ねた、すらりとした人。

「格好良い……」

あの人、誰だろう。

お兄様と話してる。

ぽーっとなつていているうちに、訓練は終わり、休憩に入ってしまった。
お兄様はさっきの人と詰め所に入って行く。
もっと見ていたかったのに。

あれは、誰だろう。

どんな人なんだろう。

……気になる。

新月休暇が明け、シユカが帰って来た。
それと側近もやって来た。

僕の側近になつたからには、僕のドレス姿も聞いている筈だ。

赤い髪の、僕と同じ10歳の男の子。

何となく、あの人に似ている。

「初めまして、ティーナ様。ルイスと申します」

「よろしくね。……あの、お兄さん、いたりしない？」

何となくだけど、似てるし。

「いえ、兄はおりませんか？」

違うのか。残念。

「そう・・・ね、ルイスも魔法学校に行くんだよね？」

「はい」

何となくごまかすために、当たり前のことを聞いてしまった。

魔法学校へ通うから、同じ学校に通う同い年の子が側近にされたというのに。

「何魔法が得意なの？」

「火系魔法が得意です。逆に水が苦手です」

シユカにお茶を淹れてもらい、ルイスと夕食の時間まで魔法の話や剣の話で盛り上がった。

番外2 ティーナ 10歳 (シユカ12歳)

「はぁ・・・」

「また溜息ですね。どうかされました？」

首を傾げたシユカを見上げた。

「シユカ・・・」

ぎゅ、と抱きつく。

「あらあら、かわいい。どうしたんですか？」

抱きしめ返してくれる。

暖かくて、良い匂い。

後でお兄様に自慢してやろつと。

「あのね、魔法騎士団にすごく格好良い人がいるの」

「・・・格好良い人、ですか」

僕は時間がある時は魔法騎士団の訓練をこっそり覗くようになった。
あの人について分かったことは、殆どない。

強さは中くらい、お兄様と良くお話してるけど、表情はいつも険しい。

それくらいなのだ。

「うん・・・僕、今まで男の人にも女の人にも興味がなかったんだ

けど・・・」

僕は今まで、ドレスを着ているけど心は男なんだと思っていた。ドレスを着たままでも、いずれ女の人を好きになるんだって思っていたのに。

ルイスが不在の今、シユカに相談しなくては。だってルイスに訊かれたら、困る。気持ち悪いって思われるかも。

シユカはそういうの気にしないと思う。男の僕にドレスの講釈垂れるくらいだし。

「まあ！ティーナ様の初恋ですね！お赤飯炊くべきかしら？」

「お赤飯??」

「あ、失礼しました。ええと、それで、ティーナ様はどうしたいのです?」

「どうしたい、って?」

「仲良くなりたいとか、お付き合いしたいとか、見るだけで良いとか」

「えっと・・・お話、してみたい、かな?」

名前も知らないし、声も聞いたことがない。

いつも見えるぎりぎりのところに隠れているから、会話何て聞こえないのだ。

聞こえるのは怒号や掛声で、あの人の声はわからない。

きつと格好良い声に違いない。お兄様みたいな。

「いっぱいお話しして、仲良くなりたい」

お付き合いなんて出来るわけがない。

だったらせめて仲良くなりたいな。

魔法騎士団の大半は貴族。

だとしたら結婚している可能性もあるし、していなくても婚約者くらいはいるだろう。

「わかりました。情報がないなら、集めれば良いのです。リオン様に聞いてみてはいかがでしょうか?」

「お兄様に?」

「はい。特徴を伝えて、名前を聞きましょう。勿論、直接聞いても良いのですが」

「無理!」

「ですよね。でしたらまずはリオン様に名前を聞いて、それから考えましょう。魔法騎士団に興味があるから見学させてもらうという口実も良いですし」

そっか!

その手があったか。

そうすればそれとなく自然に、紹介してもらっていう手もあるし。

早くお兄様来ないかなあ。

*

「久しぶりだな、ティーナ、シュカ」

お兄様が僕とシュカに抱擁して、テーブルにつく。
シュカの淹れたお茶を3人で飲む。

ルイスは外で待機。

基本的に側近でも、自分の主である王族以外の部屋には入らないし、王族同士の茶会や会合なども、ほとんどの場合は外で待機となる。そうしないと臆病者扱いなんだって。

身内を信用していないのか、とかなんとか。

「あの、お兄様。魔法騎士団に、赤い髪の格好良い人がいるでしょう？」

「赤い髪の格好良い人？」

「はい、その人の名前を教えてくださいんです」

「いないと思うんだが・・・」

「格好良いというのはティーナ様の主観、御好みですからね。取り敢えず赤い髪の方を」

「赤い髪・・・格好良いというのは、その・・・筋肉の蔵ついで男ということか？」

「違います！スラリとした格好良い男の人！！思い出して下さい！！！」

「しかし・・・赤い髪は2人も筋肉の敵つい男で、魔法騎士団には珍しいむさつくるしいやつらだぞ？」

そう考えてもスラリとしてない。

お兄様は眉間に皺を寄せる。

むさ苦しい2人を思い出しているのかな。

「・・・・あ、ティーナ様？赤い髪のスラリとした方ですよね？」

「うん」

「男性と思われたのは何故？」

「え？」

「女性なのでは？」

「ええ？」

「っていうか、キム様なのでは？」

「ああ、キムか。確かに赤い髪だな。格好良いと思ったことはないが」

「えええ？」

「消去法でそれは恐らくキム様ですね。残念ながら？女性です」

「ええええ？」

「つていうかシユカ、別に残念じゃない！

男でも女でも、どっちでも良いんだ。

あの格好良い人と仲良くなりたかっただけで、別に性別は気にしてない。

そうなるって僕男色じゃなかったんだなあ。

あ、でも男の人って思ってた時点で男色？

「そっかー。キム様っていうんだ。えへへ、魔法騎士団にいるってことは独身だよな？」

「まあそうだろうな」

「女の人ってことは、結婚出来る！僕頑張る！！」

「良かったですね。リオン様、他に何かキム様のこと、知りませんか？」

「あ、ああ……。年齢は、20歳だったかな。実家は子爵家で・
・南の出だな。剣の扱いは上手いが、体力は並。魔法はまあ、上位
だな。婚約者はいなかったと思う。あとは……。シユカに貰ったバ
ラの石鹸、気に入っているようだったが」

「そうなんだ！気が合いそう！」

つていつても、バラの石鹸、今では貴族のほとんどが愛用している程だ。

最近はこのハーブのものも流行ってきてるけど。

「お兄様、他には？他には？」

「う・・・期待に添えなくて悪いが・・・」

残念・・・どんな人が好みなのかな。

今の僕じゃどう考えても無理だよな。

年齢も離れてるし、まだ子供だし、背も低いし、キム様より弱いし。

「私からキム様に接触してみましようか？女同士ですし、口も軽くなるかも」

「本当！？」

「ティーナ様が望むのであれば」

「お願い！！」

良かった！

シユカが手伝ってくれるなら百人力だ！！

ティーナ様が喜んでくれるのは良いけど・・・。

20歳という年齢で、貴族なのに未婚、しかも婚約者もなして何

だか訳ありっぽいのよね。

シユカはティーナに気付かれぬよう、そっと溜息をついた。

番外2 ティーナ 10歳 (シユカ12歳) (後書き)

ティーナは1年前に少し話題なったくらいの側近のことなど、微塵も覚えておりません。そんなものだ。

リオンの側近は途中で変わってるので同じ年齢ではありません。

番外3 キムのある一日

「今日は、まだか・・・」

魔法騎士団、第3剣術隊。

最近、一人を除く全員の楽しみがある。

見目麗しい姫君の、訓練見学である。

おそらく、本人は気付かれていることに気付いていない。
要するに、こっそり見ているつもりなのだ。

敵ならば容赦などしないが、相手は自国の姫君。

しかもそれが可愛らしいとくれば、男ばかりのむさくるしいからすれば、目の保養、潤い、癒し。

気付かぬ振りをして、可愛らしい姫を眺めているのだ。阿呆ばつか。しかしそれはそれ、第3剣術隊唯一の女性であるキムも、楽しみでないといったら嘘になる。

可愛いだけでなく、真剣な表情でこちらを窺う姿に、そそのめるものが・・・こう・・・いやいやいや私はノーマルだ。

だが姫様が一人で現れると言う事は即ち、ルイスも撒かれているということだ。

兄弟そろってというか姉弟そろってというか・・・。

結局姫様は訓練が終わっても現れなかった。

「姫様、どうしたのかな」

皆当然のように姫と呼んでいるが、ティーナ様は王子である。

分かっているが、可愛いものは可愛いんだ！と隊長がそもそも姫と呼ぶ。

こうして第3剣術隊はまるごと姫様のファンクラブのようになっていたのだが、実兄であるリオン様だけ、その事実を知らない。知っていたらこの現状は許されないだろう。

理由は確かではないが、姫様は剣術隊に入りたいのだろう。春からは魔法学校へ入るといふ噂だ。

魔法騎士団用の宿舎は男女別に分かれている。

シャワーは宿舎に付属しているので、訓練が終われば各々宿舎でシャワーを浴びる。

その後、夕食を取り、自由時間、睡眠となる。

戦争中やモンスターの動きが活発な時期はハードにもなるが、リリスファイアはここ数百年平和な時代が続いている。

四力国同盟がある以上、早々壊れるような平和ではない。

そもそも一番近い争いといえば王位継承を巡る内乱だったので、それこそ起きるはずのない今、平和そのものだ。

*

「キム様、お久しぶりです」

「シユカ様」

侍女服に身を包んだ美少女。

一年ほど前に街で会い、それから数度挨拶を交わした程度の方。自分の主であるリオン様の婚約者候補だ。

「ご一緒してもよろしいかしら？」

「ええ、もちろん」

爵位は同等。

相席してはならないほど、上の立場の方ではない。

「魔法騎士団って、大変そうですね」

「そうですね・・・シユカ様にはちょっと大変かもしれません」

騎士団よりも魔法騎士団の方が、比較的体力は使わない。

しかしそれでも軍人である。体力勝負には変わらない。

「ふふふ、私じゃなくて、ティーナ様が入りたいとおっしゃっているの」

「ああ、やはりそうでしたか」

それを聞いて、納得だ。

「知っていたのですか？」

「よく訓練を覗きに來られていますよ」

「……………そうですね。お休みってきちんと取れているの？」

シユカ様は姫様の侍女である。

魔法騎士団のことが聞きたくて、話しかけてきたのだろう。
やさしい方だ。

「ええ、もちろん。今は平和ですからね。そんなに出動要請もありませんし」

「そう……男性とお会いする時間も取れるのかしら？」

「そうですね……魔法隊の子達は仲良くやっているようですよ」

「キム様は？」

「私は、そういうのは……」

苦笑いで返す。

姫様もお相手がいらっしやるんだらうか。
浮いた話は聞いた覚えがなかったが。

「イイ人はいらっしやらないの？」

「ええ、残念ながら」

「忘れられない人でも？」

女性はやはりこういう話が好きだな。

魔法隊には比較的女性が多く、合同訓練やシャワー室で一緒になると、そういう話になる確率が高い。

「いいえ、全然。興味がないだけです」

「そうなの？どんな方が好きなのかしら？」

「そうですね・・・誠実な方、でしょうか」

「誠実・・・」

思案顔で黙り込むシユカ様。

「家の利益になる相手と結婚、ということにはなるとは思いますかね。私に選ぶ権利はありません」

それが貴族の家に生まれた者の宿命。

結婚相手を精一杯好きになるしかないのだ。

「そうですねえ。私もそうですね」

「リオン様ですか？」

「好きか嫌いかで問われれば好きです。けどそれとこれは別って
いうか・・・キム様は王族の誰かに求婚されたらどうなさいますか

「？」

「お受けするしか、ありません」

「そうですねえ・・・王族の方の中で、誰が一番好みかしら？」

「は？・・・そんな、無礼なことは・・・」

「良いじゃありませんか、私とキム様の二人だけの秘密、ですわ」

妖艶に微笑まれ、自分が男だったら、と思う。

シユカ様は相変わらずお美しい。

ただ言動がそう思わせないというか・・・親しみやすいというか・・・。

「そうですねえ・・・」

正直、好きな王族の方はいないのだ。

完全文官な王族だと、なんというか、ぽっちゃりというかぽっちゃりというか。

武官を兼ねていると、筋肉隆々。

私はスレンダーな人が好きだ。

文官でも脂肪のついていない人というか。

「思いつきません。とりあえず、筋肉隆々な方はあまり好きではないので・・・」

「スレンダーな方が好き？」

「そうですね」

肯定すると、にっこりと笑った。

「年上と年下、どちらがお好き？」

「特に、気にしたことは……」

シユカ様がうんうん、と頷く。

何か会話が変な方向に……？

「消去法でいくと……そうですね、ウィル様、スー様、ティーナ様かしら？」

「まあ体型だけで言うとそうなのですが」

スー様と姫様は幼すぎる。

というか姫様は性別自体がちょっと……。

「ティーナ様は魔法学校に入学することですし、ドレスはやめると思いますわ」

「ああ……ドレス、似合っているのに残念ですが……しかし、王子のようにされても、似合いそうですね」

「そうですね？格好良く成長すると思いますわ」

「そうですね」

自信満々に嬉しそうに言うので、つい同意してしまっ。

顔立ちが整っているので、確かに格好良くなりそうだ。

「ああ、そうだね。今度リオン様と是非来てくださらない？ ティーナ様に魔法学校のことをお話して欲しいの。リオン様のお話って偏っているんですもの」

「私でよければ、喜んで」

「お待ちしておりますわ」

シユカ様が一礼して、立ち去る。

男が拳って振り返る。

その気持ち、よくわかる。

明日もまた早朝から訓練だ。

しっかりと睡眠を摂って体を休めよう。

自室へ戻り、ベッドに潜る。

瞼を閉じればいつも通り直ぐに眠りに落ちた。

番外4 ティーナ 10歳 (シユカ12歳)

【その一・まずは仲良くなりましょう】

シユカに相談？して数日後、お兄様と一緒にキム様がやって来た。赤い髪を一つに束ね、すらりとした凛々しいひと。ああ、格好良い！

うつとりと眺めているとシユカが手早くお茶を淹れてくれた。

「お初にお目にかかります、キムと申します」

魔法騎士団の礼をするキム様。様になっていてますます格好良い。

緊張して話せない僕を見て、シユカがキム様に色々聞いてくれる。

「あの石鹸、気に入ってくださったんですね。嬉しいですね。ティーナ様も使ってらっしゃるの」

「そうなのですか。ティーナ様には薔薇がお似合いですね」

「キム様は他に何か愛用しているものってありますか？」

愛用しているものが同じだったりして、嬉しくなる。

僕は主に魔法学校についての質問を、シユカがプライベートな質問をちよこちよこ。

お兄様は完全に空気状態。
余計なことを言ってしまうとシユカに怒られるからかな。

こうして初対面の場合は、次回の約束も取り付け無事終了した。

「うん、いい感じでしたね。完全女子トークでしたけど」

「女子トーク？」

「女の子同士の会話ってことです。まずは仲良くなることが目的ですから上々です」

*

【その二・二まめに会いましょう】

「遠くの親戚より近くの他人って言うし・・・」

「えっ？」

「ああ、なんでもありませんわ。ともかく、学校が始まってしまつとあまり会えなくなりますからね。今のうちにいっぱい会って仲良くなりましょう」

「うん！」

あと2ヶ月で学校が始まる。

それまでに出来るだけたくさん、キム様に会いたい。たくさんお話しして、キム様のことたくさん知りたいんだ。

一週間に2、3回、キム様が訪ねてくれるようになった。

お兄様は来ない。シユカに禁止されたのかな？

シユカも退室しようとしたけど、引きとめた。

だって2人きりだなんて、どうしたら良いのかわからないし。

魔法学校の話、魔法騎士団の話、家族の話、城下町でよくいくお店、愛用品の話。

恋人も婚約者も、今のところ候補の話もなく、ご両親は諦めているそう。

原因はキム様の仕事にあるんだろうけど……。

キム様は魔法騎士団を辞めるつもりは全くない。

それでも良いから結婚を、というような貴族は早々いない。

その上、お兄様の側近。

異性の側近というのはお手付き、そのうち王妃になると思われがちなので、婚約の申込がない原因になるみたいだ。

良かった。

僕が16になるまでこのままの状態であってほしい。

「キム様は御休みの日、何をしてらっしゃるのですか？」

「そうですね・・・これといった趣味がないもので、読書か買い物といった感じでしょうか」

読書か買い物。

どんな本を読むのかな。

僕はあんまり本が好きじゃないから、本のことについてはお話出来ない。残念だな。

「買い物・・・今度の休日、一緒にお買い物、なんていかがでしょう？」

「え？」

「ティーナ様は私以外の女性とお買い物に行ったことがありませんので・・・私もキム様とお買い物に行きたいですわ」

「私でよければ・・・」

「うふふ、ぜひ！都合の良い日がわかったら教えてくださいませ」

あれ、これどういうこと？

何故かほとんどん拍子で話が纏まる。

にっこりというようにやり、とシユカが笑ったのを僕は見た。

*

【その三・お出掛けしましょう】

キム様の休日に合わせてシユカの休みも被せ、3人で城下町でお買い物。

キム様が浮かないように私服で来ている。

初めて見る私服は、最近流行りの女性用パンツルックで格好良い。背が高くてすらりとして脚も長いからすごく似合う。

シユカと僕はいつも通りワンピース姿。

これも割と最近の流行りでドレスを少しおとなしくした感じのもの。動き易いのにかわいいから気に入っている。

城下町を歩く。

治安は良く、人攫いの類や泥棒も出ない。

これは僕が王族だからってわけではなくて、本当に治安が良いのだ。生活困窮者はそれなりの施設もあるし、孤児院も充実している。

王制が今の状態になってから、本当に良くなったのだと、王国歴で習った。

僕も将来、その一端を担うのだ。
頑張ろう。

1人で気合を入れてみると、いつの間にかお店に着いた。
シユカがよく利用するという雑貨屋さんだ。

「ここの布とか毛糸がかわいくて。今度編み物でもしたいなって」

「編み物をされるのですか？」

「ええ。私意外と手先器用なの」

シユカが掌を開いて見せる。

刺繍は貴族間で流行っているけど、編み物はどちらかという平民の間で流行っている。

貴族で編み物を身に付けている人がいないのはそのせいなのかな。ん？逆かな？あれ？？

「ティーナ様？入りますよ？」

「あ、うん！」

店内は女性客で賑わっていた。

布、糸、毛糸、綿など、手芸に使うものがたくさん並んでいる。

あ、この布かわいいなあ。

手触りも良い。

シユカにこれでクッションを作ってもらおうかな？

あ、そうだ。

「キム様、魔法学校で何か必要なものつてありますか？シユカに作ってもらえるものは作ってもらいたいなあって」

「ああ、なるほど・・・そうですね、教材や着替えを入れるバッグ

くらいでしょうか」

布を選んでシユカにバッグを作ってもらおう。
教材と着替えと、別々のバッグの方が良いかな。

一通り店内を見て、買い物したら次は昼食。
お腹空いたなー！

*

番外4 ティーナ 10歳 (シユカ12歳) (後書き)

遠くの〴〵の行は敢えてです、ミスではありません。

番外5

【その4・名前を呼びましょう】

昼食はキム様がよく行くという、女性に人気の食堂に行った。
周りは確かに女性が多い。

「そういえば・・・あの、ティーナ様は何故私を”キム様”と呼ぶ
のでしょうか？」

「え!？」

そうだった。

名前を知ってからずっと”キム様”って呼んでたから、さっきもそ
う呼びかけちゃったんだった。

「私のことはキムと呼んでください。確かに年齢は相当上ですが・
」

僕は王族なんで、彼女は貴族。

”様”をつけて呼ぶ、なんて普通はない。

っていつか年齢相当上って・・・そんなに上じゃないもん。
10しか変わらないもん。

子供扱いされてるよね、どう考えても。

「・・・キムはそんなに年上じゃないよ」

「え？」

「10しか変わらない」

「10も、ですよ。ティーナ様」

「・・・」

「ティーナ様、キム様、デザート頼みませんか？」

「・・・頼む」

「そうですね」

10の年の差って難しいのかな。
でもシユカとお兄様は15歳違うのに。

*

【その5・好みについて聞きましたよ】

以前、婚約者や恋人の類がないことは聞いた。
今回は、もっと掘り下げて聞きましょう、とシユカに言われたのだ。
好みのタイプとか、そういうこと。

「そうですね・・・細身で、誠実なひと、でしょうか」

細身は今のところクリア。

魔法学校入学しても剣術よりも魔法重視でいこう。

誠実って・・・誠実・・・うーん、お兄様みたいにシユカ一筋だったら良いのかな？

あれ？それって誠実じゃなくて一途っていうんだっけ？

「誠実ってなあに？」

「えーつと・・・誠実、というか、その・・・どうしましょう、シユカ様」

「え？私？」

何かぼそぼそ話している二人。

僕だけ仲間外れ！ずるい！

「私は結婚するなら、自身だけを愛して欲しいなと思います」

なるほど、大丈夫！

僕が好きなのはキムだけだもん。

「貴族の男性は浮気をする方が多いイメージがありまして・・・偏見かもしれません」

そうなのかな？

男の人で貴族の知り合いってあんまりいないからわからない。

「あ、シユカと一緒に？」

「そうですね。私とリオン様が仮に結婚することになったら、リオンの妻は私一人です。他は認めないというのが条件です」

「そんなことが出来るのですか？」

「個人同士の約束ですが・・・もし破るのなら離婚するだけです」

「はぁ・・・なるほど」

シユカ強い。

キムもシユカになんていうか・・・尊敬の眼差しっていうか・・・うん。

「後は？どんな人が好き？」

「ティーナ様もお年頃なんですね。そういう話に興味が湧くお年頃というか・・・」

「なんか子供扱いされてる・・・？」

「ふふふ、そんなことはありませんよ。大人になってるってことですよ」

絶対嘘だ。

そんな微笑ましそくに成長振りに感心されてもうれしくない！

「言うほど恋愛経験がありませんので・・・そうですね、一緒にいて過ごし易い人が良いかもしれません」

ん・・・？一緒にいて過ごし易い人って・・・どうやって目指せば良いの？

*

【その6・プレゼントをしましょう】

デザートを食べた後は、買い物に戻った。

服とか小物とか見るのって楽しい。

僕とシユカでキムに似合うものを選ぶ。

かっこいい系も似合うけど、きれいなものも似合うと思うんだよね。

キムはどちらかという困ってたけど、そこは気にしない。

女の子らしいものが苦手らしく、私には似合いませんを連発していた。

最近人気のアクセサリショップに入った。
色んな色やデザインのネックレスやブレスレット、ピアスなどが並ぶ。

女性はもちろん、男性でも魔道具にしやすいことで人気があるのだ。

あ、綺麗なピアス！

ムーンストーンの、小さな造りのものだ。

これなら邪魔にならないよね？

「ね、ね、これどうかな？」

「良いですね。キム様によく似合います」

「え、あ、あの・・・」

「これにしよう！これなら魔法も込められるでしょう？」

魔法石や宝石・天然石などには、魔法を込めることが出来る。
所謂魔道具というものだ。

攻撃補助だったり防御だったり、何らかの魔法を込めれば戦闘にも役に立つ。

「えへへ、プレゼント！僕のキモチだから！」

「あ・・・ありがとうございます、大事に、します・・・」

僕が王族だから、貰ったものは大事にしないと罪になる。

それがわかってるからこの言葉に深い意味などないことぐらいわか

っている。

「ただ今はそれでも良い。

きつとキムに心から、「こつこつ言葉を言っ
て貰えるように、
これか
ら頑張るんだから！」

*

番外 6

【その7・ギャップで攻めましょう】

「というわけで、お召替えを」

「うん！」

今日の午後はキムが来る。

なので魔法学校入学用に、男の恰好をするのだ。

とはいってもちよっとかわいい感じの仕上がり。

長い髪は少しだけ切って、後ろで束ねた。

貴族や魔法使いの男の人は髪が長くても普通なのだ。

袖がちよっときゅっとなった白いシャツに赤いリボンタイ、チエツクのパンツ、ローファー。

ローブは合わせやすいように黒。

「あーイギリスの寄宿生って感じだわ」

「え？」

「何でもないですわ」

シユカはたまに聞いたこともないような言葉を使う。
博識だなあ。

少しして、キムがやって来た。

「どうかなっ？」

新調したばかりの服をくるりと回って披露した。

「よくお似合いです。男の子みたいですな」

「いや男の子だよ、僕」

いつもドレスだけどね。

「それはそうなのですが・・・」

「えへへ。そっかあ、似合うかあ。ね、少しはカッコイイかな？」

「はい。カッコイイです」

うん、それって社交辞令ってやつだよな。

いつか本心から言ってもらいたいな。

*

「タイムオーバーですね」

「そうだよね」

この週末が明ければ魔法学校の入学式。

自由な時間が減るってことは、キムに会う時間が減るということ。
シユカとも過ごす時間が減ってしまう。

王宮で過ごす時間が減ったことで、シユカは変わらず僕の侍女だけど、4人いた侍女は2人に減る。

「まだ10歳なので範囲外でしょうから、これからは勝負ですよ」

「うーん・・・」

「魔法学校で思う存分成長してきてください。親密さは増していますからね、あとは好感を持ってもらわないと」

「成長すれば好きになってもらえる？」

「その可能性に賭けるんです。だからティーナ様、頑張りましょうね？」

「うん！」

4年間で大人になって、キムに告白するんだ！

それまでにキムに好きな人が出来たらどうしよう・・・。

うんうん唸っているとシユカが頭を撫でてくれた。

「大丈夫ですよ」

「うん・・・」

シユカ優しい。

僕が女の子だったら、お母様ももっと優しくしてくれたのかな。

＊＊

結局のところ、僕は男の子で、女の子にはなれない。

今まではドレスを着て髪を整えれば女の子に見えていた。ただどこからはそうもいかない。

身長が少し伸びた。

今はまだ少しだけど、そのうちもっと伸びる。

声変わりだっつてするし、髭だっつて生える。

いつまでも女の子の振りにはできないことぐらいわかってるんだ。お母様に愛されることがないことくらい、わかってるんだ。

矛盾してるけど、愛されてないわけではないことくらい、わかってる。

ただ、女の子だったら良かったのにつて、残念がられているだけで元々淡泊な人で、ベタベタに甘やかせるような人じゃないっていう

ことがわかったのは、割と最近。
小さい頃は本当に愛されていない、必要ない子なんだって思っていた。

自分が女の子じゃないから。

男の子はお兄様がいるから必要ないんだって。

でも今は、お母様が元々そういう人なのであって、愛されてないってほどではないことがわかってるから。

女の子の振りをしなくなっても、お母様はあまり変わらないと思う。

だからもう、女の子は卒業。

キムの理想の男になりたいし！

とりあえず。

筋肉はあまりつけないように気をつけよう、うん。

番外6（後書き）

リボンタイは蝶ネクタイではない、念のため

王妃は淡泊っていうか子育てに興味がないひと
母性本能がないというか

番外7

キムが毎週会いに来てくれて、いろいろ話して楽しかったのは、先月までの話。

とうとう魔法学校に入学、今は会えない日々が続く。

つーまーんーないー!!

今まで会えていた時間は午後、もしくはキムの休日。

今ではどちらも魔法学校の時間なのだ。

折角仲良くなれたのに、つまらない。

夏期休暇になればいつばい会えるだろうけど・・・それまで会えないのかなあ。

「ティーナ様、次移動ですよ?」

「ん、今行く」

学校ではルイスと一緒に。

「はあ・・・」

「どっかしましたか?」

「ううん、何でもない・・・。そうだ、ルイスってキムの弟なんだよねっ。」

「はい、そうですが」

「キムに婚約話とか、ないよね？」

「ないと思いますよ。昔はともかく今は婚約話が来ないようになっているとか」

「来ないようになってるって？」

「リオンの側近になってから婚約話が減り、それでも少しはあったんですが・・・先月くらいから、ぱったり」

「ぱったり？」

「父上に聞いたところ、”事情が言えん、だがキムのため、いや我が家のためだ”と」

「よくわからない」

「私もわかりません」

*

夏期休暇に入り、ようやくキムに会えた。

「キム、会いたかった!」

「はい、私もお会いしたかったです・・・身長、少し伸びましたね」

「えへへ、そうなんだ!すぐにキムの身長、追い越すからね!」

入学してから3?以上伸びたのだ。

これからどんどん伸びて、キムの身長追い越して、格好良いといってもらおうんだ。

「夏期休暇まで全然休み被らなくて、さみしかった」

「そう、ですね・・・」

「・・・キムは、さみしくなかった?」

言い淀んだのは、そう思えなかったから?

「いいえ、とても寂しかったです。ただ・・・」

「ただ?」

「休みが被らなかったのが、不自然すぎるって言っか」

「キム様?何か仰りまして?」

「・・・やはり。・・・いいえ、何も・・・」

シユカが淹れてくれたお茶を飲みながら、学校の話をする。

「さて、本日は久しぶりですからね、私は席を外しましょう」

「え?!」

「私は普段からティーナ様ともキム様とも会ってますから。外にいますので、ご用があればおよびください」

* *

シユカが退室してからぎこちないながら会話をする。
久しぶりすぎて緊張する。

「あ、そうだ。ルイスに聞いたんだけど・・・」

婚約話について。

本人なら何の話か聞いているだろうし。

「それは・・・その・・・数年後に結婚することにほぼ決定と言いますか・・・」

「え!？」

「とある方と結婚するんです。だからそれまで結婚しないようにと。もしその方が心変わりされても他を宛がうから」と

「他を宛がうって・・・」

「まあ貴族の結婚なんてそんなものですけどね。年齢的にも良くて

後妻だろうと思っていたのでそういう意味では幸運なのですが」

「結婚しちゃうの？その人のこと、好きなの？」

ああ僕泣きそう。

どうしよう。王族の権限で結婚潰しちゃったりできないのかな！？

「その方が望まれば。ただ、今回の話は周りからのお話なので、本人の意思ではないんですよ」

「・・・邪魔してやる」

「え？」

「その人のこと好きなの？好きじゃないなら結婚なんてしない方が
良いよ！」

「ええと・・・断れるようなお話でもないですし・・・好きじゃな
いわけじゃないと言いますか・・・」

「好きなの!？」

「まあ、好きというか、好きになる可能性が高いというか・・・」

何で回りくどい言い方してるのかわからないけど、それって結婚が
嫌じゃないくらいには好きってこと？

ってことは邪魔したら嫌われる!？

どうしよう、どうしたら良いの？

助けてシュカーー!!

「僕より、その人が好き・・・？」

「ええ!？」

「僕の方がキムのこと好きだもん!だから結婚しちゃダメ!」

「は・・・あ、あの・・・」

ああ、キムが困ってる。困らせてる。

こんな子供じゃ、好きになんてなって貰えないよね・・・。

「ごめん、なさい・・・。嘘、だから」

涙が溢れてきたから、俯く。

泣いたらますます子供じゃないか。

「おめでとう、キム。あの・・・体調悪くなっちゃったから、帰って・・・」

「あ、は、はい・・・あの、シュカ様を呼んできます!」

呼ばなくて良い、って言いたかったけど、声が出なかった。
とりあえずベッドに潜り込む。

泣き疲れた僕はシュカが来る前に眠ってしまった。

番外 8 (前書き)

注意：途中で視点が変わります。

番外 8

「どうするんですか!」

「といわれましても・・・」

ティーナがベッドに潜って泣いている頃。

廊下では声を潜めてこんな会話が繰り返されていた。

「そもそもこの話、私の発案ではありませんよ」

「違うんですか!?!」

てっきり。

「発案は親馬鹿兄馬鹿コンビです」

「馬鹿って・・・」

「リオン様が考えそうなことってどうか・・・外堀から埋めるの好きなんですしょうか」

遠い目をするシユカ。心当たりがあるらしい。

「ティーナ様がせっかく男の子として生きようとしているので、リオン様は精一杯手助けをしようとしているのでしよう。キム様に振られてはまた女の子に戻ってしまうかもしれないしね」

「ティーナ様は、本当に・・・？」

「ええ。その気持ちは第三者から明かさないように、リオン様なりに気を遣ったんでしょ？」

ティーナとの結婚話は、”女性に心を開くのは珍しいため、これを逃したくない”というリオン様のときと同じような話の持って行き方だ。

シユカにも心を開いているがすでにリオンの婚約者扱いだ。

「キム様も、ティーナ様のこと好きでしょう？」

にっこりというより、にやりだ。

「謀りましたね」

「そんな。意識してもらうためにほんのすこーし小細工はしましたが、謀るといっほどでは」

幾分年齢が低すぎる。

小細工でもしなければ恋愛対象として見ることはありえない。シヨタコンなら話は別だが、キムは一応ノーマルな性癖である。

「もうこうなったら腹を括って告白して来てください」

「え！？」

「別に相手はあなたです、だけで告白のよつなものでしょ？」

「なんで・・・!」

「そうでもしないと、ティーナ様悲観して女の子に戻るかもしませんし」

「じじじじ」

「うぶぶ、あとはよろしくお願いしますね?」

いつの間にか眠ってたみたいだ。
ぼんやりと天蓋を見つめる。

「ティーナ様?」

「・・・キム?」

戻って来たのだろうか。

困った。
きつと脛が腫れている。こんな顔見せられない。

「あの、結婚の話なのですが・・・」

「うん・・・」

「相手は、その・・・」

「・・・・・・」

聞きたいような、聞きたくないような。

聞いてしまったら最後、闇討ちでもしてしまいそうな自分がある。

「嫌だったらもちろん結婚なんてしなくて良いんです、でももし嫌じゃなかったら・・・どっちにしろ6年後なわけですし・・・」

「私の結婚相手は、ティーナ様なんです」

「・・・え？」

「リオン様や国王がお話を進めているようでして・・・ティーナ様が16になったとき、私と結婚させようという・・・その、そのころには私、26ですし、思いつきり適齢期逃していますし・・・あの・・・ああ、違うんです、嫌だったら断って頂いて良いんです、ティーナ様が嫌がれば無理やり結婚なんて、させられないと・・・」

「僕が、キムと結婚するの?」

信じられなくて、キムを見る。

「……はい、ティーナ様がよろしければ」

「キムは、嫌じゃない?」

「……ありがたいお話だと思います」

ありがたい。

ありがたいって何?

「……僕が、王族、だから……?」

「え?」

「王族だから、ありがたい?王妃になれるからってこと?」

「あ、の……」

「……今はそれでも良いよ。でも、いつか、僕のこと好きになっ
てくれる?」

僕は好きになってもらって、結婚したい。

だったらあと6年で、好きになってもらえば良いんだ!

「今でも、好き、ですが……これから、もっと好きに、なります」

「本当!？」

「はい」

「えへへ、うれしいな!」

僕はキムに抱きついた。

シユカより筋肉ついているから硬いけど、良い匂いがする。

僕も愛用中の薔薇のおいだ。

「僕も好き。大好き。早く僕のことたくさん好きになってね!」

親愛の意を込めて、キムの唇にちゅっとキスした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4920p/>

とある主婦の2度目の人生

2011年2月21日16時25分発行